

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニューズレター
1995.10.1

34

情報知識学会事務局 発行〒110 東京都台東区台東1-5-1(凸版印刷(株)内) TEL03(3835)5692 FAX03(3837)0368 ISSN0915 1133

目 次

諸学問の領域を越えた「超」整理法なんてあるのかな？	1
文体と平仮名の割合	2
アーティスト・デザイナーたちの情報ニーズ	3
フル・テキスト・データベースにおける多言語処理の可能性と不可能性	7
電子メールに出来ること	10
ミュージアムにおけるインターネット利用	12
第10回「大学と科学」公開シンポジウム	14
第9回専門用語研究会シンポジウム	16

諸学問の領域を越えた「超」整理法なんてあるのかな？

—あるいは、なぜ自分の机の周りは乱雑なんだろう？—

成城大学 千速敏男

野口悠紀雄氏の『「超」整理法：情報検索と発想の新システム』（中公新書，中央公論社，1993）が80万部を突破したとか。日本中の職場で、よれよれになった茶封筒が机の前に並んでいるのでしょうか。と言いつつ、わたしも、いま、週に何度か通っている職場では茶封筒を使用順に並べていますが、たしかに日々「流れていく」仕事には好都合なようです。

野口氏の主張の一つは、図書館のように分類することをあきらめて、時間の順序に従って資料を並べなさいという点にあります。このようにきっぱりと提案できるのは、彼が経済学を研究しているからだろーうと思いました。経済学では「仕事の内容や問題意識は、流動的で、時間の経過とともに変わる。このため、分類項目を固定できない」（22ページ）ようです。この本が多く読者の支持を受けたのは、いまの日本では、同じように「流動的で、時間の経過とともに変わる」仕事をしている人が圧倒的多数を占めているからでしょう。

ところが、本業の西洋美術史研究にこの方式を活用しようとしたとたん、大混乱。あのめったに使わないがとても重要という「神様ファイル」ばかりが異常増殖して、机からはみ出し、書棚からこぼれ……。どうも「ためこんでいく」仕事とは相性が悪いようです。

こうした蓄積型の仕事に関して、野口氏は「個人用の場合にも、『決して捨てないもの』については、別のシステムが適用されてよい」（71ページ）と述べ、「神様ファイルと認定されたものについては、内容分類して図書館方式で保存すること」（51ページ）としています。さらに追い打ちをかけるように、「写真の整理も絶望的である」（82ページ）とのおことば。……あの、数万コマもある美術作品のスライド写真はどうすれば……。どうやら美術史にはこの夢のように楽な整理法は活用できないようです。

とはいえ、わたしは、野口氏はえらいなと思いました。ちゃんと自分が提唱する方法論の限界を確認し、有効範囲を提示するというのは、とても重要だからです。

仕事と方法は密接につながっています。だから、仕事がちがえば方法もちがいます。そして、仕事をすれば、情報がまとわりついてきます。とすれば、「情報処理の方法論」を考察するためには、なぜ自分の机の周りが乱雑なのか、このあたりから考えてみなければ、ならないようにも思いました。(でも、これって、ただわたしが不精なだけなのかもしれませんね)

ニューズレター今号は、いく人かの方々に「身近な」問題を語っていただきました。

文体と平仮名の割合

—川端康成におけるその時代的変遷—

久留米工業大学 山崎清巳

(E-Mail:yamasaki@cc.kurume-it.ac.jp)

三島由紀夫は「永遠の旅人—川端康成氏の人と作品」の中で、「たとえば川端さんが名文家であることは正に世評のとおりだが、川端さんがついに文体を持たぬ小説家であるというのは、私の意見である。なぜなら小説家における文体とは、世界解釈の意志であり鍵なのである。混沌と不安に対処して、世界を整理し、区画し、せまい造型の枠内へ持ち込んで来るためには、作家の道具としては文体しかない。フローベルの文体、スタンダールの文体、プルーストの文体、森鷗外の文体、小林秀雄の文体、……いくらでも挙げられるが、文体とはそういうものである。」と述べている。

ここでいう文体とは、広辞苑の(style) 文章の体裁。作者の思想または個性が文章の語句・措辞などに現われている全体の特色、を指すといえよう。

また川端康成は、「文学的自伝」の中で、「私の近作では『抒情歌』を最も愛している。『死体紹介人』や『禽獣』は、出来るだけ、いやらしいものを書いてやれと、いささか意地悪まぎれの作品であって、それを尚美しいと批評されると、情なくなる。」と述べている。

川端が述べている「最も愛している」作品と「いやらしいもの」とには、どのような違いがあるか、それともないのか。

このような作品をコンピュータに入力して分析すると、文体といわれるものの一端でも現れるであろうか。幸い「抒情歌」も「禽獣」も短編である。また前者が1932年、後者が1933年に書かれて、著作時期ならびに作品の長さもあまり変わらないので、比較検討するには好都合である。また作者の好みがこれほど明確に述べられている作品も珍しいのではないか。

入力したデータに対して、平仮名の割合を求める。これはコンピュータのもっとも得意とする指標である。たとえばナイスライター(マッキントッシュのワープロソフト)でツールメニューから文字数...を選ぶと、文字数、2バイト文字合計、ローマ字、句読点、カタカナ、ひらがな、第一水準漢字、第二水準漢字などの数が出てくる。この二つの作品の平仮名の割合は、「抒情歌」が69%、「禽獣」が62%であった。両作品の平仮名の割合の差は、川端康成の好みを表わすのか。

これを確かめるために、川端康成の有名な作品「伊豆の踊子」「雪国」「千羽鶴」「眠れる美女」の平仮名の割合を求める。しかし、これらをすべて入力しなくても、川端康成の作品における平仮名の割合の傾向を求めるだけなら、それぞれの作品で数千字を入力すればいいのでは

ないか。「抒情歌」と「禽獣」の5000字と全体の平仮名の割合を比較すると、「抒情歌」では5000字、全体ともに69%、「禽獣」では5000字、全体ともに62%であった。

有名な4作品での平仮名の割合は、「伊豆の踊子（1925）」が60%、「雪国（1935-47）」が65%、「千羽鶴（1949-51）」が66%、「眠れる美女（1960-61）」が72%であった。これで見ると、川端康成は時代を追って、平仮名の割合が増加する傾向にある、といえよう。そしてこれは、すでに1932/33年の「抒情歌」と「禽獣」において好みとして認識していたといっても過言ではなかろう。「文学的自伝」が書かれた1934年には、『抒情歌』を最も愛している」として、その傾向を認識し、その方向への努力を重ねたのであろう。そしてその努力の結果が三島由紀夫には文体のない作家という風に見えたのではなかろうか。

表 1: 分析した作品名、平仮名の割合および著作年（ただし、入力文字数は約5000字）

作品名	伊豆の踊子	抒情歌	禽獣	雪国	千羽鶴	眠れる美女
平仮名の割合	60%	69%	62%	65%	66%	72%
著作年	1925	1932	1933	1935	1949	1960

アーティスト・デザイナーたちの情報ニーズ —美術系大学図書館における利用者の傾向—

東京造形大学図書館 大江長二郎

1 はじめに

現在、美術・デザイン系大学（以下、美術系大学）の数は短大も含めると全国に約30校ある（いわゆる美学・美術史などの美術系学科をもつ大学を含めると約250校になる）。これらの美術系大学では、絵画や彫刻、工芸、グラフィックデザインや工業デザイン、インテリアデザイン、あるいは映画などの学科を持ち、それらの学生数は約5万人に達するのではないと思われる。そこに附属する図書館では、図書や逐次刊行物等の一般的な図書館資料のほかに展覧会カタログや企業のPR誌、ポスターや版画といった視覚資料、ビデオ資料やCD-ROM等の光・磁気メディアといった資料群の収集をも積極的におこなう館が増えてきている¹⁾。

一方、このような美術系大学図書館における機械化は、『日本の図書館』（日本図書館協会年刊）によれば、1983年に京都工芸繊維大学と九州芸術工科大学の国立大学図書館が図書・雑誌の発注・受入から閲覧までのトータルなコンピュータシステムを運用しており、私学では大阪芸術大学図書館が閲覧用のシステムを運用していたところから始まっているようだ。翌1984年からは毎年1〜2館ずつコンピュータの導入館が増加し、1990年になると東京芸術大学図書館をはじめとする4館が一斉に図書の整理から閲覧利用を目的とするトータルシステムの運用を開始した。全校のデータが揃っていないので確実ではないが、1984年から1990年までの間に集中して機械化が行われたことがうかがえる。その後1991年には、合計8館がNACSIS-IRなどの外部データベースを利用しており、情報ネットワークの本格的な運用の時代を迎えたといえよう。そして、今年7月には武蔵野美術大学美術資料図書館がインターネットによるホームページを開設し、新たな展開が始まったことを予感させる²⁾。

このような状況の中で、利用者はどのような観点から図書館を利用するのかを明らかにし、その対応の一端を事例的に述べてみたい。

2 美術系大学図書館の利用者ニーズと代表的な資料群

美術系大学図書館における利用者のニーズと、それに対応する資料（情報）を類型化するなら、概ね次のようなような構成が考えられる。

1. 知的体験・美的刺激（感動）のための観賞・娯楽用資料
オリジナル作品、ブラウジング用資料（感性を刺激する図書・雑誌等）、ビデオ資料ほか
2. 学生生活のための情報
情報誌、地図、ガイドブック・ビデオ資料（旅行、建築、美術館・博物館等）、電話帳、企業名鑑、留学案内等
3. 講義関連図書
教科書・指定図書等、美術・デザインの概論および歴史概説書ほか
4. 作品製作に必要な資料
技法書・ビデオ資料、コンピュータ・ソフトの操作マニュアル、材料見本（画材、紙・色・書体見本等）、製品カタログ、利用者のイメージした特定の図版を含んだ資料ほか
5. 主題研究のための資料
図書、雑誌のバックナンバー、研究紀要、美術館等の館報、PR誌、統計書ほか

美術系大学で、多くの学生がアーティストやデザイナーになることを希望する。彼らは時代の感性と表現能力を武器に、さまざまな方法で自分なりに表現してみたいと考えているようだ。そうした彼らの一般的な読書は、極めて雑食的かつ折衷的であるように思える。さまざまな素材によって新しいモノのかたちと色彩を作り出すためには、そうした方法が最も自然で効率がいいのかもしれない。上記「1」の資料群で示したブラウジング用資料とは、そうした読書傾向に最も効果的なものであろう。しかし、こうした一見曖昧に思える読書方法によって、彼らの記憶の中に留めた一枚の画像を追って探索を迫られることが多い。それは、本屋で立ち読みしたのか図書館で見たのかも曖昧で、もちろん雑誌名もあやふやで、いつごろ自分がそれを見たのかについてはおおよその見当がつくし、その中の図版についてはよく覚えているといった状況の中で、一緒になって推理ゲームを展開する。

また、上記「4」における「利用者のイメージした特定の図版」とは、我々にとっても頭の痛い存在である。しかしその必要性は、彼らが学ぶ基本的な作品製作のプロセスを知ることによって理解できる。そのプロセスを略記すると、以下のようになる。

- 美術作品の場合：
問題意識（またはコンセプトの明確化）→アイデア抽出→イメージデッサン→素材決定→製作決定→作業開始
- デザインの場合：
仮想クライアントから受注（コンセプトの確認）→アイデア抽出→イメージデッサン→プレゼンテーション（素材の指定含む）→クライアント（教員）による製作決定→作業開始

このように学内では、実社会の現場にそって作業が進行する。ここでの美術作品とデザインの大きな違いは、クライアントが作品に対してどのように関わるのかということであり、製作を開始する前に、クライアントにこれから造ろうとする作品を具体的にどのように説明（プレゼンテーション）するのかということが、デザイナーの必要条件となっている。このとき、作品のイメージをより具体的に表現するために画像をコラージュ（貼り付ける）する手法を用いることが多い。デザイン製作の課題が始まると、学生達はある日突然、特定の画像を求めて図書館にやってくる。

もし仮に図書館で目的のものを発見すれば、再び彼らはやってきて自分で探したり我々に新たな質問を投げかけるだろうし、図書館で発見できない場合は、彼らは街に行き画材店や本屋あるいは企業の広報部等に直接出向いて資料を入手したりする。近年渋谷や池袋にある「ロゴス」や、六本木の「青山ブックセンター」といった美術・デザインに関する洋書を重点的に揃えた専門店の進出は、こうしたニーズを背景にしているのではないかと思われる。彼らは第一義的には、求める資料さえ揃っていれば無料である図書館の利用を考えているはずである。なぜなら、アーティストやデザイナーを目指す学生にとって、高価な画材や機材費の捻出に絶えず追われているからである。特に、デザイナーにとっては時間の制約もある。製作のための時間を割いてまで、資料の収集に費やすことはできない。しかも彼らにとって、過去の作品を知っていないということは致命傷である。それは、彼らの作品にオリジナリティーがあるのかということ来判断するためには、過去の作品をより多く知っていなければならないからである。このようなことから、＜美術系大学図書館における情報ニーズの主体は画像である＞ということができるのではないかと考えている。また、このような図書館利用者の傾向は、日本に限ったものでもなさそうだ³⁾。

彼らが求める画像を大きく分けるなら、作家作品と百科全書的図版の二つがある。特に百科全書的図版は、歴史的遺物から新製品といったモノの形態から自然現象や社会状況（事件写真や肖像写真）まで、あらゆるものの図版が対象となっている。しかし現在に至るまで、図版探索のよりどころの多くは、推理のカンや記憶に依存するという人間的な作業であるために、あやふやで極めて困難な場合が多い。長期休暇（夏・冬）の後ともなると、「以前見せてもらった」と言う利用者の追及が悪夢のように思えたりする。探索ツールの不備や、これまでの多様な画像探索に関するレファレンスの記録を、蓄積してこなかったことにも苛立つ瞬間だ。

3 1枚の図版を探す

たとえば利用者は、レファレンスサービスのカウンターに「海の風景を撮った写真集はありますか」と聞いてくる。もし仮にそのような内容の本が所蔵されていたとしても、利用者は実はそういった本を漠然とブラウジングしたり、読んで海の風景写真の撮影方法について勉強したりというわけではないことが多い。したがって、すぐに端末で探索という行動に移ることはあまりない。我々は最初に利用者とその写真の使用法（目的）や、具体的な海のイメージについて聞くことになる。彼らのイメージは極めて具体的であるために、より正確でなければならない。その海は南国か北国か、そこには人物がいるのか、浜辺は岩場か砂浜か、波の状況はどのようなか、写真はカラーかモノクロか、といったいくつかの質問の中で、資料の大まかな選択を行っていくのである。たとえばそれは海の写真集ではなく、雲の写真集であったり“National Geographic”や『Newton』などのグラフィカルな雑誌の1ページ、あるいは旅行会社の1冊の

パンフレットなどであったりする。

4 映画の一場面から出典を探す

ある日の教員からの質問はこうだった。「映画『地獄の黙示録』の最後の場面でカーツ大佐が独白した台詞が聖書のパロディではないかと思うが、その事実関係を知りたい。今週中に返事をもらえればありがたい。」

調査は、『地獄の黙示録』がいつごろ日本で上映されたものかを知るために、記憶を頼りに『雑誌記事索引』を見るところから始めた。その映画のシナリオが、最初の手掛かりとなるからである。シナリオがなければ映画を観るしかない。しかし、それはすぐに『キネマ旬報』1980年1月初旬号に全訳シナリオの掲載があることを教えてくれた。その台詞というのは詩の一節だった。その詩を繰り返し読んで感じたことは、アルチュール・ランボーとかアメリカのビート詩人たちの作品かもしれないということだった。しかし、次の手掛かりがない。もう一度『雑誌記事索引』にあたって、映画の評論記事を探すことにした。数日間は、空いた時間の中でいくつかの関連文献を通読していった。そう簡単に次の展開が得られそうにもないし、言い訳を見つけることに専念したほうがよさそうだ。そんなことを思いながら読み進むうちに、同誌1979年10月下旬号に掲載された『地獄の黙示録』の評論記事「ヴェトナムを突き抜ける狂気の文明論」（金坂健二著）の中で、T・S・エリオットの詩『荒地』に触れた一節を発見した。何はともあれ、早速館内の端末でエリオットの作品集を見つけだして、最初の『荒地』から読んでいく。（これ、昔読んだよなー）と思いこみつけると、なんと、あった！ あったのだ。しかも、約束の期限の日に。

それは、翻訳に微妙な表現の違いはあるが、1925年に作られた『うつろなる人々』（又は『空ろなる人間』）という訳題の詩を、冒頭から台詞に引用していたのだ。聖書までの道のりを残していたが、その旨を質問者に伝えた。結局調査はその時点で終了することになったが、相手が満足すれば（仮に満足しなくても）、我々は彼らが求める以上の調査をすることはない。

我々はレファレンスサービスのカウンターで、絶えず画像や映像に目を向けさせられている。

注・参考文献

- 1) 『美術分野の文献・画像所蔵機関一覧』（アート・ドキュメンテーション研究会編集・発行 1995.2）によれば、東京の私立4美大（女子美、多摩美、東京造形、武蔵美）での展覧会カタログは、和洋合わせて36,000冊を所蔵し、ビデオテープ・ビデオディスクの所蔵は合計約4,000巻（枚）となっている。
- 2) 『日経MAC』No. 29（1995.8）, p. 72
- 3) IFLA ハバナ大会（1994.8）における美術図書館分科会で、Deirdre C. Stam が発表した‘Artists and Art Libraries’ というテキスト（“ART LIBRARIES JOURNAL” Vol. 20 No.2, p.21-24）によれば、アーティストやデザイナーたちが図書館で本や雑誌、広告を雑食的にむさぼり読むだけでなく、特定イメージ（画像）の探索を執拗に行っている様子が報告されている。

フル・テキスト・データベースにおける 多言語処理の可能性と不可能性

法政大学 石川 伊織

フル・テキスト・データベースの作成で重要なのは、原書の表記をできる限り再現することであり、しかもこうして作成したデータに汎用性を持たせることである。

DOS/V はマルチリンガルなシステムであると言う人もいるが¹⁾、ヘーゲル・テキスト・データベース²⁾の校正に長年たたずさわってきた立場からすると、これは疑問である。なるほど DOS/V のシステムはコードページを切り替えることで数種のヨーロッパ系言語の混在を可能にしはする。しかし、人文・社会科学の文献に使われているのは、DOS のコードページがサポートする言語ばかりではない。たとえばヘーゲルのテキストには、彼の母語であるドイツ語を中心に、英語、フランス語、イタリア語、ラテン語、さらにはギリシア語、ヘブライ語等が使われている。コードページ 437 でも 850 でも、これら全てをカバーすることはできない。

それ以上に問題なのは日本語との共存である。我々がフル・テキスト・データベースを使うのは研究のためであり、その結果は多くは日本語で書かれた論文なり著作なりの形で公表される。この中に外国語が埋めこまれるのである。ところが、現在の DOS/V マシンでは、これらの1バイト系言語を日本語と混在させることは、英語を除いて不可能である。日本語の使用を可能にするコードページ 932 は、コードページ 437 でウムラウト等の割り振られた肝心の129番目以下のコードを、2バイト文字の1バイト目と半角カタカナに充てているからである³⁾。

たしかに多言語の共存が可能なワードプロセッサは多い。だが問題なのは汎用性なのである。「一太郎」でもドイツ語・フランス語の混在する文章は書ける。しかし、「一太郎」のファイルは「一太郎」でなくては読めないし、「一太郎」が使えないマシンでは読めない。テキスト・データベースを個人で作成して個人で使うのならこれでも良い。しかし、公に配布するデータはどんな条件下でも利用できなくてはならないのである。

テキストの最初に特殊な文字をどう表現したか書いておいて、利用する側で自分のシステムに合わせてこれらの文字を置換してもらえばよいではないか、という意見もあろう⁴⁾。しかし、それができるのはパソコンに精通した人である。広く一般に使ってもらうには、一定以上の能力をもった利用者のみを対象とするわけにはいかない。必要なのは、非互換マルチリンガル・ワードプロセッサではなく、OS レベルのマルチリンガル環境なのである。

ヘーゲル・テキスト・データベースの場合も、まず問題になったのは NEC の PC9801 でどうやってドイツ語のウムラウト等を表現するかであった。当初は EPSON のプリンタが準拠している国際文字の記述方法⁵⁾を用いた。この規則で入力しておけば、EPSON のプリンタを使用している限りで、ディップスイッチの変更のみでウムラウトの印字が可能になる。もちろん、ウムラウト等のディスプレイ表示は不可能だし、当然、ドイツ語・英語以外の言語の共存も不可能であった。

ヘーゲル・テキスト・データベースは、弘前大学の清水明氏の作られた検索ソフト TEXAS を添付して配布される。TEXAS は、テキストから目的の単語を検索し、その出現箇所の一覧表を出力することを主な機能としている。前方一致・後方一致の検索も可能であり、さらには

こうして作成した検索集合の和集合・積集合を作ることにもできる。後に TEXAS はドイツ語・フランス語等のフォントをプログラム自体がサポートするようになった。これによって、ディスプレイ表示も可能となったが、これは他面では TEXAS レベルでの閉じたデータベースへの逆戻りでもあった⁶⁾。

MS-Windows は、こうした問題を解消するはずであった。DOS/V の場合にはコードページの切り替えで多言語の処理を可能にしていたが、この切り替えにはシステムの再起動を必要とした。Windows ではフォントファイルを指定することでシステムの再起動無しに、ということは同一の文書ファイルの中で多言語を共存させることが可能なはずであった。

しかし、Windows が採用した標準テキストファイルは DOS のテキストファイルだった。ゆえに、エディタでファイルを読み込んだだけでは、それが何語で書かれたファイルなのかわからない。同一ファイル内に複数の言語とそれに対応した複数のフォントが指定されていても、これを判別する手掛かりが無い。Windows に標準添付の write というエディタの書式を使えば、互換性のあるテキストを作成できはする。しかし、何と write は 129 番目以降の欧文文字を扱えないのである。日本語版 Winsows とそのアプリケーションは、日本語も使えるソフトウェアではなくて、むしろ、日本語しか使えないのだ。アプリケーション開発者たちは、日本語を使えるようにするために、英語版では可能であったマルチリンガル環境を切り捨ててしまったのである。

アプリケーション開発者たちは、事態の深刻さをほとんど理解していない。大半の Windows 用ワードプロセッサは、ドイツ語・フランス語等を入力できはするが、Windows 標準の ANSI キャラクタセットで書かれたテキストファイルは読み込めない。Windows に添付されている notepad でも文字化けする。MS-Word は ANSI コードのファイルを開くこともセーブすることもできるが、セーブする時点でキャリッジリターン・コードを行末に多数挿入する。さらに、Word 文書の形式に直してセーブしようとするとうハングアップする⁷⁾。Visual Basic や MS-C といった開発言語でも、マニュアルにすら出ている 1 バイト文字を処理する関数が 2 バイト環境ではうまく動作しない、といった例が報告されている。これをメーカーは「仕様である」と言い、我々は「バグである」と言う。OS レベルのマルチリンガル環境への道はまだ遠い。

このような劣悪な条件の下ではあるが、現在ヘーゲルのテキストの ANSI コード化を推進中である。ANSI コードの方が DOS のコードページ 437 よりも原文に忠実なデータを表記できるからである。TEXAS の Windows 版はまだ存在しないので、ANSI コードのテキストを検索するソフトウェアが必要になるが、共同で校正にあたっている跡見女子大の神山伸弘氏が、検索・出現箇所の一覧表示・当該箇所へのカーソルのジャンプが可能なアプリケーション、Easy Checker を開発中である⁸⁾。

発足して数年がたつヘーゲル・テキスト・データベースであるが、悩みもある。この間継続してテキスト・データベースの案内をしているにもかかわらず、データを入手したヘーゲル研究会員は 30 名程 (15%) にとどまっているのである。当初は、DOS の操作が難しいといった苦情もあった。しかし、普及率が低い理由はそればかりではないらしい。近ごろ多い問い合わせは、「それは何の役に立つのか」であるからだ。

黒崎政男氏は CD-ROM 化された辞書をめぐって書物のシーケンシャル性を論じている⁹⁾。小説や哲学書はシーケンシャルに書かれているが、書物という媒体の性質上シーケンシャルなだけで、じつはそうではない書物もある。辞書・事典がそれである。

この区別は、書物を読むという作業の本質を考える上でも有効だろう。思考の展開を秩序

立てるとき、論文・書物に書き表すことを考えると、どうしてもシーケンシャルな構造とならざるをえない。しかし、人間の思考は必ずしもシーケンシャルではないはずだ。書物を読む、特に哲学書を読むという作業は、シーケンシャルに表現されてはいるけれども決してシーケンシャルではないかも知れない思考を、分析的に読み取ることである。

ただ読むだけなら通読すればよい。しかし、これを研究するとなるとテキストの解釈が必要となる。解釈とは、シーケンシャルな体裁になっているテキストを分解して、構造を明らかにすることだ。明らかにされた事柄は、再度シーケンシャルな形式に整序されて、論文・書物として世に送り出される。研究者がテキストを読みながらこつこつカードを作っていくのは、シーケンシャルなテキストの分解作業であり、論文作成とは分解した構造の再シーケンシャル化だったのである。

ワードプロセッサは、登場したばかりの頃は文書の清書装置と考えられていた。それが今や文書作成装置と見なされている。研究という作業の後半部分における構造の再シーケンシャル化にとって、コンピュータ利用の有効性が研究者の間で認知されたのである。

これとの対比で言うなら、テキスト・データベースは、研究という作業の前半部分での、つまり、シーケンシャルなテキストを分解・分析するための道具である。「それは何の役に立つのか」という問いは、この部分でのコンピュータの有効性が未だ認知されていないという現状を物語っている。

研究者の要求を充たすようなデータベース・ソフトウェアが早急に求められている。巨大なソフトウェアが必要な訳ではない。ワードプロセッサと同時起動させておける優秀なビューワーや検索プログラムがあればそれで充分なのである¹⁰⁾。データのANSIコード化は、Windows環境を生かすことでテキスト・データベースそのものを認知してもらおうという意図でもある。

静岡大学の浜渦辰二氏はフッサール・データベースを作成されたが、底本の出版社（オランダ）から公開を禁じられ、重要単語400語の検索結果のみの公表で断念されたという¹¹⁾。「真理は万人によって求められることを自ら欲し」¹²⁾ているはずであるが、出版社自らが知の普遍性を否定するとは、世も末である¹³⁾。

註

- 1) 三上吉彦他編著『電腦外国語大学』技術評論社(1993)、p.15
- 2) 加藤尚武千葉大学教授（現京都大学）が企画され、鶴巻幸平氏のご尽力で完了したフル・テキスト・データベース。G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, (Suhrkamp Verlag) が底本（版權は加藤教授が所有）。加藤教授が世話人を務めるヘーゲル研究会向けに、データの校正と配布を筆者が担当している。
- 3) コード体系は違っているが、129番目以降の欧文文字が使用できないという点では Macintosh も同様である。
- 4) 前掲書p.152ff. 小澤照彦「ドイツ語・英語でのテキスト・データベースの作成と処理」参照。
- 5) 『EPSON MJ-500 取扱説明書』p.104等を参照。
- 6) TEXAS の最新版は DOS/V 版（TEXAS/V）である。

- 7) この問題に関して、筆者はマイクロソフト社に文書でバグの報告をしたが、なしの礫である。
- 8) ヘーゲルのテキストのスペルチェック用に開発されたためこの名前がある。ヘーゲル著作集の各巻は1MB以上の巨大ファイルであり、これを一度に読み込んで実用に耐える速度で作動するスペルチェッカとなると、自分で開発するしかないのである。
- 9) 黒崎政男『哲学者クロサキのMS-DOSは思考の道具だ』株式会社アスキー(1993), p.219ff.
- 10) 霧生和夫氏はテキスト・データベースを「テキストと検索システムの合体したもの」として、通読のための全文データベースとは区別する。しかし、通読も分析も可能で、書物を読むように使える検索システムでなくては研究者の必要には応えられまい。『電脳外国語大学』p.143 参照。
- 11) 静岡大学人文学部人文論集 第46号の1(1995年7月31日)、p.1-49.
- 12) あえて出典は記さない。古典の文庫を次々と絶版にする神保町の某出版社よ、反省しなさい。
- 13) ヘーゲル・テキスト・データベースの入手をご希望の方は筆者までお電話(0425-62-0512)ください。

電子メールに出来ること—PHonEM の場合—

都立大学人文学部 本間 猛

1 電子メールは電子の手紙(メール)か

最近では、多くの大学で研究者はもちろん、大学院の学生や学部学生まで、比較的簡単な手続きで、電子メールを使えるようになってきている。電子メールは、通常の手紙と同様の使い方も出来るが、電子メールでなければ、実現しにくい仕掛けも多数存在する。メーリング・リスト(以下 ML)もその一つである。以下、ML の具体例として、我々が運営している PHonEM を紹介する。

2 メーリング・リスト(ML)

PHonEM (Phonology on E-Mail) は、言語学の一分野である音韻論に興味を持つ人々が電子メールを通じて、様々な情報を交換する事を目的にしているグループで、現在は、リムネット上に fml (東工大の深町氏による UNIX OS 上の ML 管理ソフト)を用いた ML を中心に活動している。

PHonEM は、まず、NIFTY-Serve を利用している二人の電子メールのやり取りから始まった。当時は、まだ、NIFTY-Serve から Internet のアドレスにメールの送付が不可能であった。

二人の学問上の興味は似通っていたので、ある博士論文を一緒に読んでみようということになり、適切な分量を読んでは、コメントを交換していた。しばらくすると、この二人の知り合いも次第に巻き込まれるようになる。NIFTY-Serve の電子メールサービスには、アドレスブックという仕組みがあり、複数の相手に同報メールを比較的簡単に送付することができる。確かに、アドレスブックの内容をやり取りするための仕組みがNIFTY-Serve には用意されているのだが、アドレスブックは各ユーザーが個々に設定する必要があるので、同報グループが数名の規模を越えると、管理が難しくなる。さらに、Internet とメールがやり取り出来るようになり、PHonEM にも、Internet からの参加者が増えるにつれて、NIFTY-Serve の仕組みに依存したままでは、グループの維持が困難になるに至り、PHonEM を ML として運営が始まったのが、今年(1995年)の4月1日である。

PHonEM の ML 化に際しては、当初、IIJ のメーリングリストサーバサービスの利用を検討していた。提供される機能、運営の自由度、費用などを考慮し、最終的には、リムネットのサービスを利用する事となった。リムネットのサービスそのものは、ごく基本的な ML の機能を提供するものだが、ユーザの側にその運営が任されている分、自由度が高い。さらに、fml は、一度だけスーパーユーザーの手を煩わすだけで、基本的には、一般ユーザーの権限で運営出来き、かつ、十分小型の ML 管理ソフトである。小型とはいえ、メールヘッダの加工(連番の付与など)、メールのアーカイブ、メンバーリストや過去のメールの取り寄せなど、ML 管理ソフトが必要とするような機能は十分装備されている。

UNIX マシンの管理を任せれており、root 権限を持っている人なら、fml を用いて、小規模ながら、実用的な ML を簡単に運用出来るはずである。root 権限がない人でも、自分のサイトの管理者に協力を願うなり、リムネットに加入するなりすれば、ML を運用するのも、難しい事ではない。

3 PHonEM の現在

PHonEM は、現在、十数名の小規模な ML として活動している。雑多な話題に交じって、とある音韻論の教科書の練習問題の解答案の作成・検討などのプロジェクトも進んでいる。日本の音韻論研究の発展に多少なりとも貢献出来ればと思う。

※ PHonEM に興味を持たれた方は、phonem-list-request@st.rim.or.jp もしくは、honmat@st.rim.or.jp まで、その旨を伝えていただきたい。

<http://www.st.rim.or.jp/honmat/phonem.html> も参照の事。

※ fml は、平野聡氏の hml をベースに、深町氏が拡張した ML 管理ソフトである。詳しくは、<http://www.phys.titech.ac.jp/uja/fml/>を参照の事。

ミュージアムにおけるインターネット利用 —その展望と課題—

トータルメディア開発研究所 木下達文

1 一枚の新聞記事の切り抜きから

平成7年5月10日付の日本経済新聞に「米スミソニアン博物館、インターネットで情報発信」というタイトルの記事が載っているのに目が奪われた。折しも、戦後50年を契機にアメリカのスミソニアン博物館が思い切って「原爆展」を開催しようとしたが、退役軍人等の猛烈な反対にあい、当時の館長は辞任に追い込まれ、特別展は単なるB-29（エノラ・ゲイ）単体のみの何のメッセージも持たない展示会に縮小せざるを得なくなる事態が盛んに報道されていた時期であっただけに、強烈に私の興味を引いた。記事によるとその内容は、「マルチメディア対応のデータベース機能、ワールドワイドウェブ（WWW）で、世界のどこからでもインターネットを通じて1500ページを超えるスミソニアン情報にアクセスできるほか、展示品の一部をコンピュータ画面上で見ることも可能になる。」とある。この記事を見る以前からインターネットについても多少の興味はあったが、本格的に稼働するにはまだまだ先の話のような気がしていた。ところが、様々な事情があるにせよ世界に開かれたミュージアムをめざしてその第一歩を踏み出しているスミソニアンの現状を知って、日本でもこれを専門的な立場で研究していかなくてはならないなと強く感じた次第である。

2 国内におけるこれまでのミュージアムネットワーク

インターネットを語る前に、これまで国内のミュージアムにおけるネットワークについて私の知っている範囲で簡単に触れてみたい。ミュージアムネットワークと一言でいってもその内容は様々である。本学会の会員であれば、“コンピュータを利用した情報のネットワーク”と考える人が多いのでわないかと思われる。しかし、この言葉でくられるものの中には、大きく3つのタイプがある。人的ネットワーク（人の交流—派遣みたいなものも含まれる）、資料ネットワーク（いわゆる特別展などで行われる実物資料の交換や、出版物資料の交換などを意味する）、情報ネットワーク（これがコンピュータネットワーク）である。ここで取り上げたいのはもちろんであるが、ともこれまでの論議に含まれていたことを留意しなくてはならない。また、コンピュータネットワークのなかでもさらに館内ネットワークと館外ネットワークとに分けられる。残念なことに、日本では館内ネットワークを持つ施設の方がはるかに高く、館外ネットワーク（つまり他の施設、あるいは個人との情報交換にコンピュータを利用すること）はいまだにほとんど行われていない状況で、整備も一番立ち後れている。そうした状況の中で、前年度全国科学博物館協議会が中心となって「資料情報のネットワーク化に関する調査研究」が行われ、最近その報告書ができあがった。その中でも国立の施設を含め先進事例がいくつか示されているが、ネットワーク化についてはサイエンス系のミュージアムにおいてこれからといった感が強い。唯一注目に値するのは、インターネットとパソコン通信である。インターネットについては後で触れるように今後に大きく期待されるネットワークで、パソコン通信は現在ネットワークと呼べるにふさわしいものの一つである。国立歴史民俗博物館をはじめ、阪神大

震災のあった兵庫県にある県立人と自然の博物館など数館でミュージアム情報等のサービスを数年前から開始している。基本的にはテキスト情報が中心であるが、一般の市民が通常のパソコン通信と同じようにデータベースを利用したり、電子メール等で情報交換のできるシステムとなっている。また、美術館等では、数館が提携して所蔵作品のデータベースをネットワークを通じてハイビジョンで楽しめるといったところもある。しかし、全体的にみて日本におけるミュージアムのコンピュータネットワークは、ほとんど確立していないといった状況であろう。

3 インターネット（マルチメディア）時代の ミュージアムネットワーク

もうすでに多くの方がインターネットに触れ、あるいは実際に導入されていることと思われるので、ここではミュージアムとインターネットとの関わり、特にネットワークとしての利用について考えてみたい。インターネットとは、ご承知のようにネットワークのネットワークとして本来は大学や研究機関等が公共目的としてアメリカを拠点として構築されてきたものであるが、商用目的にも門戸が開かれたことによって、日本ではなぜかビジネスとしての利用がとやかく新聞で騒がれている。ミュージアムがインターネットを利用することは、本来の公共性を取り戻すことであるとともに、より開かれた施設として明確化したいへん意義のあることだと思われる。ところで、現在インターネットで情報を提供しているミュージアムは世界中で約100館程度で、日本も徳川美術館をはじめとして数館ほど登録している。私もそれらの画面が見たくて、最近話題のインターネットカフェに赴き、いろいろと試してみた。インターネット上で何ができるかというのは、それぞれのミュージアムで何を提供しているのかによって様々である。たとえば、スミソニアン博物館では、ミュージアムの沿革から常設展示内容、イベント情報、教育プログラム、出版物等の豊富なメニューがホームページに設けられており、その内容もかなり深いレベルにまで及んでいる。ライト兄弟の複葉機からアポロ宇宙船に至るまでの映像情報も見ることができる。また、出版物については、その概要が示されており、通版で購入することができるようになっている。驚いたのは、サンフランシスコのエクスポラトリウムでは科学館であるにも関わらず、日本人の撮った長崎の原爆後の写真を無声映画のように見ることができたことであった。現時点では、施設のパンフレット、あるいはカレンダー情報、図録情報などをインターネット上で提供しているといった感じであるが、それだけでも日本に居ながらにして、瞬時に入手できるといったことはたいへんな驚きであった。将来的には、静止画像だけでなく動画などもビデオ・オン・デマンドのように解説映像も自宅に居て必要な情報が見れるようなサイバーミュージアムが日常的になる日がくるかも知れない。ミュージアムに限らず、公共施設というものは場所と時間が限定されるだけに、地域にあっても遠ければ行かなくなってしまうのは当然のことである。文字あるいは映像や音声情報としてネットワーク上に乗せれるものであれば、それらは二次情報ではあるが大いに役に立つはずである。逆に、ミュージアムとしては本来の一次情報（本物＝オリジナル）の持つ役割というものを明確にし、二次情報との棲み分けが必要になる。また、これだけコピー文化が発達した時代に本物を有することの意味がまた見直されてくるのではないだろうか。

4 おわりに

インターネットができたからといってもいい事づくめではない。画像通信の時間がまだ非常に遅くそれだけでストレスを感じるなどコンピュータシステム上での問題点や、基本的にネットワークの無い状態からデータを最初から構築するための人や金などミュージアム側としての問題点、パソコンを使用するために20代から30代の若い人が中心になってしまうという点、国内を除いて標準語が英語であるということなど様々な課題が前途にはある。しかし、ここ数年の内に多くのミュージアム（特に大型の施設や科学・美術系が中心となろう）で簡単なものから本格的なものに至るまでホームページが開設されることになる。私個人としてもインターネットから情報発信ができるように努力したいと考えている。

主催：第10回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会／後援：文部省
第10回「大学と科学」公開シンポジウム

情報スーパー・ハイウェイ―加速する研究・教育・医療―

このシンポジウムは、わが国の大学等の研究者によって達成された最新の独創的かつ先端的研究成果を、学界だけでなく、広く一般の方々に公開・発表し、理解していただくことを目的としております。

多数のご参加をお待ちしております。

日 時： 平成7年12月5日(火)～6日(水)

場 所： 東京／日経ホール

参加費： 無料（申込者が多数の場合は、抽選となります。）

第1日目：平成7年12月5日（火）－10：00～17：00－

A. 挨拶 第10回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会／文部省

B. 総合講演 <司会>学術情報センター教育研修部長 井上 如

- 社会資本としての情報インフラストラクチャー

学術情報センター所長 猪瀬 博

- 情報スーパー・ハイウェイと新しい研究環境

ラトガース大学副学長 ジェームス・フラナガン

C. デジタル技術の中の研究情報 <司会>学術情報センター教育研修部長 井上 如

- 電子漢字六万五千字―漢籍のコンピュータ処理の現状―

京都大学人文科学研究所助教授 勝村 哲也

- 写真で甦る日本開化史－日文研における写真データベース
国際日本文化研究センター助教授 小野 芳彦
- 電子図書館早分かり
学術情報センター教授 安達 淳
- 電子文書・電子出版から電子取引まで－SGMLをめぐる諸活動－
学術情報センター教授 根岸 正光

第2日目：平成7年12月6日(水)－10:00～17:05－

D. 情報教育への拡がり <司会>学術情報センター教授 根岸 正光

- 電子美術館－ミュゼ・イマジネールの実現－
東京国立博物館情報管理研究室長 高見澤 明雄
- 情報利用教育－学術情報サービスの礎石として－
学術情報センター教育研修部長 井上 如
- 情報教育の現状と将来
大学入試センター副所長 坂元 昂

E. 加速する医療と生活 <司会>学術情報センター教授 根岸 正光

- ネットワーク生活の時代
ニフティ(株)取締役企画部長 山川 隆
- 電子ブックの開発と可能性
ソニー(株)CAVカンパニーPAV部門 担当部長 宇喜多 義敬
- 超高速通信と病院ネットワーク
東京大学医学部教授 開原 成允
- 脳と情報における個人差の意味
元東京大学教授 養老 孟司

F. 座長挨拶 学術情報センター教育研修部長 井上 如

- 申込方法：■住所・郵便番号・電話番号（自宅か勤務先かを明記）
■氏名・年齢・性別 ■職業（勤務先・役職名）
■セッション名『情報スーパー・ハイウェイ』
■参加希望日時（2日間両日のご参加も歓迎致します。）
をご記入のうえ、はがき、またはFAXでお申込みください。
受講者には、資料引換券を郵送します。

- 申込み・お問合せ先：『情報スーパー・ハイウェイ』事務局
〒105 東京都港区虎ノ門3-16-7 ピュア虎ノ門3F（有）アドスリー内
TEL：03-3459-0006 FAX：03-3459-6894

第9回専門用語研究会シンポジウム 国際関係とターミノロジー

専門用語の研究には用語の翻訳や標準化に代表されるように、国際的な視野が強く求められます。そこで今回、情報知識学会との共催で「国際関係とターミノロジー」というテーマでシンポジウムを開きます。シンポジウムのあとに総会を開催します。

テーマ 国際関係とターミノロジー

日時 平成7年12月2日(土) 13:00～17:00

会場 中央大学駿河台記念館(東京 お茶の水)

プログラム 司会 石川徹也(図書館情報大学教授)

開会挨拶 柴田 武(専門用語研究会会長 東京大学名誉教授)

講演 1) 専門用語としての和製英語

Kenneth Jones(帝京大学教授)

2) 専門用語の中国語と日本語の比較(仮題)

周 艶華(図書館情報大学留学生)

3) 国際開発とターミノロジー

佐々木 由香(名古屋大学大学院国際開発研究科助手)

4) 食品名の用語化、規格化、国際化

太田 泰弘(文教大学国際学部教授)

専門用語研究会総会

懇親会(17:30-19:00)

参賀費： 専門用語学会および情報知識学会費 4,000円
上記以外 6,000円

懇親会参加費： 6,000円

問い合わせ先： 「専門用語研究会」

〒102 東京都千代田区一番町 4-6

一番町中央ビル 2F 日本総合技術研究所内

Fax: 03-3262-8960